

帰国報告書

サンパウロ大学 伊藤将大

先月終わり、六月の23日に地球の裏側であるブラジル連邦共和国より帰国した。例えば、留学のスタートからスムーズとは言えず、いくつかの苦勞をしながら初めての海外挑戦をしたが、振り返ってみるとそれはとても短く感じた。日本で生まれて日本で育った私にとっては今回が初の海外長期滞在となったわけだが、とりわけ日本から最も遠い国であるブラジルでは、様々なサプライズが待っていた。

僕にとってブラジル渡航は今回が初めてではなかった。そのため、ブラジルのことは自分なりにわかっているつもりで、特に気を張ることなく留學生活を始めようとしていた。だが、ブラジルに着いて二日後、洗礼を受けるかのように何かの感染症にかかってしまい、そのまま一週間を寝たきりで過ごした。その後も慣れない土地での慣れない生活は想像以上に厳しく、自分の考えの甘さを認識した。その中でも特に大きな違いは食生活だと考える。ブラジルでは日本のようにスープはない上、サラダはあまり食べず野菜を食べるときは基本的に生の状態で食す。地域によって違いはあるものの、基本的にはブラジル米に煮た黒豆をかけて、おかずは肉や卵であった。さらに、時間に余裕がある場合を除いて朝食はしっかり摂ることはなく、コーヒーを飲むだけである。そのかわりなのか、午後3時頃に軽食を取るのだが、ほとんど食事のような量を食べるため、それで一日3食としているようだった。そのため、夕食の時間がとても遅く、最悪だと10時を超える日もあり、日本と時間の感覚が大きく異なる。しかし、朝は日本と比べて早めに活動を始めることが多く、夜の睡眠時間は日本にいたときよりも少ないと感じた。最初はその生活ではあまり体がもたなかったが、ブラジルでは昼寝の時間が存在するため、それで対処していた。

このように、ブラジルと日本では物質的な、また物理的な感覚が大きく異なることがわかった。では、ロジカル的な面、人々の考え方や態度といった面ではどういった違いがあるのか。

ブラジルでは、個人の主張がとても大切にされている。例えば、どんな集団で決め事をしていても意見を持った人は必ず反論するし、その少数派の意見もかなり真剣に考慮に入れる傾向がある。そのため、ブラジルでは発言しない者は賛成者もしくはオブザーバー参加のように思われてしまい、決定に影響をもたらすことはできない。日本でもそうであるが、ブラジルではそれがいくらか強いと感じた。

また、ほとんどの人が無意識のうちに個々人の自由を認めている。例えば、アメリカやカナダでは執拗に自由や人種差別の撤廃を訴えているが、ブラジルにはそもそもそういった問題がほとんどないように思える（政治家には圧倒的に白人が多いが、それは歴史的に白人が支配層であり富裕層だったため）。そのため日本人に対しても同じブラジル人の友達に接するようにしてくれる。そこに「何人」という考えはなく、一人の人間として個人を認めてくれる。それは私がブラジルで感じた最も愛すべき点である。これを文化と呼ぶのかどうかわからないが、今後もこういった傾向が続いていくことを願ってやまない。

帰国報告書

サンパウロ大学 伊藤将大

これまで述べてきた通り、私はブラジルでとても価値ある経験をする事ができ、それは私が探し求めていたものであった。この経験で私は目標であるグローバル人材に大きく近づくことができたこと強く確信している。今後、農大で勉強する多くの学生が海外、ブラジルで知見を広げ、共に切磋琢磨できることを願う。また、この機会は農大の国際協力センターが与えて下さり、また私の担当教授など様々な方に支えていただいたため、この場をお借りして深く感謝申し上げたい。